第４５回

和歌山県学校体育研究大会
海草地方大会

報告書

期　日　　令和５年１１月１７日（金）

会　場　　全体会　　海南市民交流センター
　　分科会
　　小 学 校　海南市立内海小学校
　　中 学 校　海南市立第三中学校
　　高等学校　和歌山県立海南高等学校 海南校舎

主　催　　和歌山県教育委員会　　和歌山県学校体育研究協議会
主　管　　第 45 回和歌山県学校体育研究大会海草地方実行委員会
後　援　　海南市教育委員会　　紀美野町教育員会

大　会　役　員

【 会 長 】
森　　文哉

【副会長】
川畑　豪則　　清水　　歩　　和田　通尚（開催地実行委員会委員長）

【 顧 問 】
宮﨑　　泉　　清水　博行　　中嶋　　宏　　栗生　好人　　鍋田　泰延

【 参 与 】
田伏　利久　　坂口なおみ　　橋爪　信也

【委員長】
鈴木　功太

【副委員長】
小杉　栄樹　　流川　鎌語

【 委 員 】
榊　　洋史　　奥出　和史　　上野　大雄　　松下　裕充　　阪口　貴史

芝﨑　公彦　　上野山達也　　坂本　融治　　小谷　剛史　　橋本　和輝

瀬田　公寛　　工藤　英樹　　林　　宣行　　井口　英夫　　廣田　隆弘

古川　　一　　増野　　彰　　山田　充洋　　中岡　曉紀　　後藤　伊世

亀田　梨理

海草地方実行委員会

委 員 長	和田　通尚（巽中）	
副委員長	川久保尚志（海南高）	阪口　貴史（大野小）
	松尾　研也（巽中）	

事 務 局

事 務 局 長	芝﨑　公彦（巽中）	
事務局次長	大上　　聖（海南高・海南）	阪井　亮介（亀川小）
会　　計	相谷　直佳（下津第二中）	
理　　事	井邊　正城（東海南中）	庄田　光敬（海南高・海南）
	東岡　伸佳（中野上小）	
幹　　事	段木　雅博（海南高・大成）	山下　恭平（野上小）

専 門 部

専門部長	松尾　研也（巽中）	
総 務 部	事務局に同じ	
研 究 部		
部長	芝﨑　公彦（巽中）	
	阪井　亮介（亀川小）	大上　　聖（海南高・海南）

顧　　問	海南市教育委員会教育長	西原　孝幸
	紀美野町教育委員会教育長	東中　啓吉
	海草地方小学校長会会長	福田　修武（加茂川小）
	海草地方中学校長会会長	北東　謙治（下津第一中）

第45回　和歌山県学校体育研究大会海草地方大会　開催要項

1　趣　旨　「運動やスポーツの多様な楽しみ方を共有する体育授業」を主題に研究実践を行う。「共生の視点」や「主体的に運動に取り組み、仲間とともに運動やスポーツができる喜びを感じることのできる授業」を目指して、授業研究や研究協議を行い、学校体育の一層の充実を図る。

2　主　催　和歌山県教育委員会
和歌山県学校体育研究協議会

3　主　管　第45回和歌山県学校体育研究大会海草地方実行委員会

4　後　援　海南市教育委員会　紀美野町教育委員会

5　期　日　令和５年１１月１７日（金）

6　会　場

全体会場	海南市民交流センター　ふれあいホール 海南市下津町下津５００－１　０７３－４９２－４４９０
小学校	海南市立内海小学校 海南市鳥居１９０　０７３－４８２－０２５８
中学校	海南市立第三中学校 海南市鳥居１５－３　０７３－４８２－０５６３
高等学校	和歌山県立海南高等学校　海南校舎 海南市大野中６５１　０７３－４８２－３３６３

7　研究主題

「運動やスポーツの多様な楽しみ方を共有する体育授業を目指して」

○小 学 校　『自ら進んで運動（遊び）に取り組み、仲間とともにできる喜びを感じる体育授業』

○中 学 校　『主体的・対話的で深い学びの実現に向けた保健体育科の授業づくり』～共生の視点を重視して～

○高等学校　『スポーツの多様な楽しみ方を学び続けられる人材育成を目指した授業づくり』

8　日　程

9:25　9:45　10:20　10:30　12:00　13:15　13:30（高校は13:50）　16:00

受付	開会式 表彰式	休憩	特別講演	昼食 移動	受付	小 小 中 高	公開授業	休憩	研究協議

9　特別講演

演　題　　『自己効力感を高める全国レベルのチーム作り』

～日々の取り組みが自覚、誇りを生み出す～

講　師　　大原　　弘　氏　（和歌山大学　硬式野球部　監督）

10　公開授業

校種	学校名	学年	授業者	領域（単元）
小学校	内海小学校	第２学年	南　拓哉	表現リズム遊び「表現遊び」
		第４学年	土橋貴紀	走・跳の運動「リレー」
中学校	第三中学校	第１学年	西脇公孝	球技「バスケットボール」
高等学校	海南高等学校	第２学年	山本さおり	球技「バレーボール」

11　研究協議会

校種	会場名	運営	司会	提案	指導助言	記録
小学校	内海小学校	阪井亮介（亀川小） 奥山寛文（巽小）	辻　直敬（巽小）	熊代悟志（下津小）	山田充洋（県教育委員会指導主事） 林　修（和歌山大学）	東　浩輝（南野上小） 森本浩輝（亀川小）
中学校	第三中学校	中南桂太（巽中） 相谷直佳（下津第二中）	井邊正城（東海南中）	芝﨑公彦（巽中）	中岡曉紀（県教育委員会指導主事）	嶋田雄介（亀川中） 平　晃知（海南中）
高等学校	海南高校海南校舎	大上　聖 庄田光敬（海南高校海南校舎）	谷本真宣（海南高校海南校舎）	山本さおり（海南高校海南校舎）	増野　彰（県教育委員会指導主事）	段木雅博（海南高校大成校舎）

全　体　会

日　時　　令和５年１１月１７日（金）
　　９時４５分～１２時００分
会　場　　海南市民交流センター

１　開　会　式

（１）開 会 宣 示　海草地方実行委員会　　副委員長　　川久保　尚志
（２）開会の言葉　海草地方実行委員会　　委 員 長　　和田　通尚
（３）あ い さ つ
　　和歌山県教育委員会　　教 育 長　　宮﨑　　泉
　　和歌山県学校体育研究協議会　　会　　長　　森　　文哉
（４）来 賓 祝 辞
　　紀美野町教育委員会　　教 育 長　　東中　啓吉
（５）主催者紹介
（６）あ い さ つ
　　次期開催地　和歌山市実行委員会　　委 員 長　　川畑　豪則
（７）閉 会 宣 示

２　表　彰　式

（１）功労者並びに表彰者の紹介
（２）表彰
（３）被表彰者代表謝辞

３　特 別 講 演

講師紹介　　副委員長　阪口　貴史
演　　題　　『自己効力感を高める全国レベルのチーム作り』
　　～日々の取り組みが自覚、誇りを生み出す～
講　　師　　和歌山大学硬式野球部監督　大原　弘

４　全体会閉会

分科会

海南市立内海小学校

『自ら進んで運動（遊び）に取り組み、仲間とともにできる喜びを感じる体育授業』

第２学年・授業者	南　　拓哉
第４学年・授業者	土橋　貴紀
学年・領域（単元）	第２学年・表現リズムあそび（表現遊び）
	第４学年・陸上競技（リレー）
運営	阪井　亮介（亀川小学校）
	奥山　寛文（巽小学校）
司会	辻　　直敬（巽小学校）
提案	熊代　悟志（下津小学校）
指導助言	林　　修（和歌山大学）
	山田　充洋（県教育委員会）
記録	松本　拓也（日方小学校）
	森本　浩輝（亀川小学校）

１提案内容

〈海草地方学校体育研究会小学校部会の取組について〉
「自ら進んで運動（遊び）に取り組み、仲間とともにできる喜びを感じる体育授業」を研究主題とした。

【主題設定の理由】
学習指導要領において、生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成すると示されている。
また、昨今の学校教育が抱える課題として、児童の体力の低下や運動する子供とそうでない子供の二極化、Society5.0をはじめとした高度情報化社会により、コミュニケーションが苦手な児童が増えてきている等の課題がある。そこで、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の視点からの授業改善を行うことで生涯にわたって運動に親しんだり、健康的な生活を送ったりする豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育成することにつながると考えている。運動（遊び）の多様な楽しさを味わわせることで、興味・関心が高まったり、運動（遊び）の仕方を工夫したりすることで、仲間とともに課題解決に向けて試行錯誤を重ねる、仲間とともに乗り越えていく喜びを感じることにつながると考え、令和３年度から研究主題を上記のように設定した。

【研究の内容】
海草地方では、４つの内容に取り組んだ。

①　授業づくり３つの視点
授業づくり３つの視点として「授業の流れの統一」「主運動に向かうための運動」「教師の役割」を意識して取り組んだ。

②　態度測定
学習者の体育授業に対する態度を「よろこび」「評価」「価値」の３因子で捉え、どのように感じているかを測定した。児童が体育に対してどのように感じているのかがわかり、非常に効果的であった。

③　年２回の授業研究
従来授業発表者となった教員が、広めたい・研究したい分野で授業を行っていたが、昨年度は県学体研を想定し、プレ授業という形で研究を行い、取組を本地方内の学校に広めた。

④　ICT機器の効果的な活用
教員だけではなく、児童がいつでもデータベースや資料を閲覧できるようにするため、インターネットにアクセスできるようにすることが大切であると考え、こういった環境をデザインした。

【研究の成果】
昨年度３年生での表現運動「おどって、全身で表そう～体でクッキング～」では、準備運動や単元の流れ、表現運動で使うBGMなどをインターネッ

トにアクセスすればいつでも活用することができるようにした。「ポップコーンに大変身」という時間では、ロイロノートを使いイメージを広げるために動画を準備した。いつでもインターネットにアクセスでき、自分たちの表現に活用できた。

陸上運動においても、ロイロノートの共有ノートを使い、手本となる動画をアップした。児童が撮影したものについても共有ノートに保存し、自分自身や友達の走り方・バトンの受け渡し方を手本動画と見比べ、技能向上、意欲向上につなげることができた。振り返りでは、友達と意見交流したことや気付きなどを記入し、自分と違う考え方やポイントなどを共有することができ、次の授業に生かすことができた。

【今後の研究】

・　小体連として年２回の研究授業を行い、本地方内の各校に取組内容を継続して広げていく。

・　研究授業を生かしながら、各領域の系統表を作成していく。

２　研究協議

○授業者より（南教諭）

今回授業を行った２年生は、昨年度も体育の授業を担当していた。昨年度も表現遊びの授業をしているが、「○○になる」ということまでしか実践できなかった。今年度は、もっと夢中になって「生き物になりきる」というところまで、子供たちと一緒にやりたいという思いがあったため、「生き物」というテーマを２年連続で設定した。より「生き物」になりきっていくためには、導入から楽しい気持ちになるように意識することが大事だと感じた。

そのため、準備運動では、みんなで紀州っ子かがやきエクササイズを声に出して踊ってみたり、紙の動きや太鼓の音、友達の動きに合わせて動いてみたりするなど、リズム遊びを取り入れることにした。

子供たちも授業を進めていく上でだんだん声が出るようになってきた。今日は自分の指示不足なところもあり、動きが小さくなったり、固くなってしまったりしたところもあったが、今後の指導の中で子供たちの動きを変えていきたいと思う。

前回は「海の生き物」をテーマにしたが、今回は「虫」をテーマにした。設定の理由としては、クラスで「虫」が好きな児童が非常に多いことや、「虫」は人間からしたら小さい生き物だが、弱い存在ではなく、強く生きているんだということを感じて、表現してもらいたかったことが理由である。初めはカマキリになりきらせるようにした。「カマキリ＝強い」というイメージが児童にはあり、すぐ戦いにいく児童が多かったが、強いだけではなく、多様にイメージを広げたいと感じた。カマキリを観察させる中で、「カマキリってこんなんだよね」と一緒にイメージを共有していくことによっ

て、本当になりきっていくということを目指した。本時案では、幼虫になりきることも設定していたが、幼虫まで扱ってしまうと、時間が足りなくなってしまう可能性があり、幼虫になりきるのは省略した。その分、導入時に子供たちが幼虫につながる動きをしたところを声かけしたり、ふりかえりでその動きを一緒にやってみたりするなど、少しでも動きを経験させることができるようにした。子供たちを見ていると、いろんな虫になりたいという思いから、様々な動きは見られたが、自分の指導の甘さがあり、走り回っているだけだったり、動きが小さい児童がいたりした。今後は、子供たちの動きをよく見取って指導できるようにしていきたいと思った。子供たちを見ていると、最後まで笑顔で踊っていたり、なりきろうとしていたりして、授業者として嬉しく思った。最後に、今回授業で使っている音楽は、ディズニーの中にある BGM や明るい曲を選んで、雰囲気が明るくなるように努めた。

○授業者より（土橋教諭）

子供たちはいつもより緊張感を持って、頑張ることができた。

本時は、全７時間中の５時間目となっている。子供たちの様子から、今までバトンパスの工夫をしてきて記録を伸ばすことができていたが、今日のめあてが一番重要だったと感じている。バトンパスに注目しすぎて、ゆっくりスタートした方がバトンをもらいやすいと感じた児童が、バトンパス時のスピードを緩めてしまっていたという振り返りがあった。そこで、次への課題として本時のめあてを設定した。結果、記録は全チーム伸ばすことができた。記録が伸びたことに子供たちは感動して、スピードは全力で出した方が良いと実感したのではないかと感じている。一方、課題を解決するための練習方法として設定した練習は２つであり、少ないと感じる人もいたのではないかと思う。しかしこれは、自分自身が陸上競技をやってきた中で再現性が重要だと感じている所から考えたことである。再現性を高めるためには、コツコツと積み重ねられるシンプルな練習が大事だと考えており、今回は練習を２つに絞っている。手の角度や手の高さ、顔の向きや体の向きという点より、スピードを落とさずにしっかり走り切れるというところに注目してほしかったからである。指導者も教えやすく、子供たちもシンプルでわかりやすく練習を行えるのではないかと思っている。賛否はあるかもしれないが、陸上競技に向けて、一つの達成感を感じたり、リレーの面白さを感じたりすることができる７時間であってほしいと思い、指導案を作った。

○質疑応答

質問：那賀地方　教諭　回答：南教諭

【質問内容】

①　めあての設定にあたって授業者としてどのような思いがあったか。

【回答】

①　めあてに迫るためには、動きを引き出すための教師の言葉掛けが必要なため、一つの生き物なら指示をしやすく動きを引き出しやすいと考えた。今回は共通するテーマが難しく、話の変化で動きの変化につなげることが難しかった。これから、子供との対話のなかで体の動かし方を伝えていけるようにしていきたい。

質問：和歌山市　教諭　回答：南教諭

【質問内容】

①　児童の動きを紹介し、全員で動きをまねることができれば、動きの質を高めることができると思うが、紹介するものと紹介しないものの差は何か。

【回答】

①　どれを取りあげるかを悩んだ。児童の動きで拾いきれないものも多かった。例えば、這う生き物だけど、這う動きをしていないものなどに焦点を当てた。今後は、児童の動きから必要な動きを取りあげられるように教材を様々な視点から分析し、より理解を深めていけるようにしていきたい。

質問：和歌山市　教諭　回答：土橋教諭

【質疑応答】

①　練習で二人同時ダッシュを取りあげた意図は何か。リレーのバトン渡しとは条件が変わってしまうので、練習の意味がないのではないか。

②　ペットボトルキャップを児童はどの程度、理解することができていたのか。

【回答】

①　二人同時ダッシュはリレーに直結しにくいことが分かった。きっちりリレーのバトン渡しの距離と一致するわけではないが、ある程度決めることができると考えていた。一番のねらいは、全力でダッシュをすることで、スピードを緩めればバトン渡しは安定するが、記録を伸ばすためには全力で走ることが大切なので意識させたかった。

②　ペットボトルキャップの効果はあまりなかった。個人で持っていられるもので、自分のマークだという親しみを持って取り組んでもらいたかったがあまり親しみを持ってもらえなかった。実際は、目分量で走っている児童も多かった。バトンなどの教具も１人１本使えるように用意した。今後改善をしていきたい。

質問：和歌山市　教諭　回答：土橋教諭

【質疑応答】
①　単元計画の最後の時間のリレー大会はどのようなことをするのか。
②　児童のバトンパス・スピードが緩む原因は何にあると考えているか。

【回答】
①　「受ける・渡す」の両方を経験させたいので、それぞれの児童が両方を行ったうえでその２回の合計タイムと個人の持ちタイムとの差で競う方法を考えている。児童は大会に向けて、人と比べるのではなく、自分のベスト記録を出せるように取り組んでいる。
②　もらい方とスタートするタイミングに原因がある。児童は近寄ったら渡しづらい、遠くても渡しづらいと話していて、対話しながら進められている。

【質問者より】
リレーの良さは、個々の技能差をバトンパスで埋めることができ、走るのが得意な児童も苦手な児童も一緒に取り組むことに喜びがあることだと考えている。今回の授業は、「追いかけ走」のような形に見えた。今回の単元で児童に喜びが生まれるかが疑問。
また、斜めに走る児童も多かったので、直線を引くなどしてまずまっすぐに走りやすい支援があると良い。リレーは鬼遊び的な要素が強いので、まず、「ぎりぎり追いつける、ぎりぎり追いつけない」を意識できてから、バトン渡しに取り組むべき。また、テイクオーバーゾーンに１ｍ間隔の線があれば分かりやすい。
タブレット端末でバトン渡しを撮影していたが、スピードが緩む原因を児童が分かる場や教具の設定になっていない。また、同時ダッシュは教師がクリアしてほしい課題とあっていなかった。児童に何をしてほしいかの視点をはっきりと示す必要があった。

【授業者より質問】
①　それは４年生としての目標か。

【質問者より回答】
①　指導要領を参考にしてほしい。指導要領をもとにして考え、話した。

質問：那賀地方　教諭　回答：土橋教諭

【質問内容】
単元計画では、リレーのバトンパスが中心の指導になっているが、全力で走るために渡す児童、もらう児童に指導したことがあれば教えてほしい。

【回答】
昨年度の熊代教諭の取り組みで、８時間でかけっことリレーの指導を行ったが、指導しなければいけない量が多く、指導しきれない実態があった。今年度はその経験から、かけっこを１学期の新体力テストに合わせて指導を行い、今回はリレーのみにした。スタートの姿勢、腕の振り方などについて動画撮影等を行いながら学習を行った。今回は、リレーのみにしたが１学期の学習内容を忘れている児童もいた。

○指導助言（山田指導主事）

前単元で 30m～50m のかけっこに取り組む中で走り出しの姿勢を学習し、今回はタイミングよくバトンの受け渡しをするというところにスポットを当てて単元を構成していた。学習指導要領解説体育編に記載されている指導内容が多いことから、単元を分けて指導する計画を立てていて、感心した。常に一定の条件で、受け手・渡し手の状態を変えずにバトンの受け渡しをする手立てがなされていて、「何秒縮まったのか」というところに学習の焦点を当てることができていた。

学習の軌跡を見てみると、タイミングよくバトンの受け渡しをするために、受け手が走り出すタイミングや、受けるときの体の向きや手の形等について学んだ内容が記載されており、4 年生で深く学習できていると感心させられた。

授業者は、リレーで学習すべき内容を子供たちが学びやすいように様々な手立てを行っていた。交錯しないようにスタート位置をずらしたり、メジャーやキャップを子供たちに自由に使えるようにしたり、子供がバトンを受けたいと言っていた場所に線を引いたりするなど、子供の学びたいという欲求をかなえてあげるための手立てを行っていた。

課題としては、１つ目の活動で、動画を撮る際に、たまたまスタートが遅れてバトンパスをミスしてしまったチームがあった。ミスをした映像をもとに今日の課題に取り組むことになってしまうと、バトンパスをよくすることは難しいのではないかと考えられる。第 3 時の際の、バトンパスが一番うまくいった動画をもとに今日の課題に取り組むことができるようにすれば、タイムを縮めるための ICT の活用として、より効果的になったのではないかと考える。

また、チーム内の児童の役割だが、走る児童・バトンを受ける児童・撮影する児童の他に、残りの児童で役割があやふやな児童がいた。その児童に、キャップの位置の調整やバトンの受け手がスタートするタイミングの声かけをさせるようにしたらよかったのではないかと考える。

さらに、二人ダッシュの場に、テイクオーバーゾーンのエンドラインがないと、受け手側がどこでもらったのかがわかりづらいと感じた。

今回の学習では、タイムを短縮するというところに楽しさや喜びを感じることができていて、バトンパスが上手になったという実感を得ることができ

ていたように思う。だからこそ、7時間目のリレー大会の行い方について考える必要がある。やはりリレーといえば競走して勝ち負けが決まり、子供たちの「やったー」・「残念」といった声が欲しいと感じる。今回の授業は、授業者がタイムを計って、短くなったということに喜びを得る授業となっているので、非常に正確なタイムを要求される。それを子供たちで、自主運営し、競走できるようになればと思う。例えば、4人チームなので、4人全員で走ったときの競走タイムで競ったり、2周走っての着順で競ったりすることで、競走の醍醐味を味わわせてあげたらどうかと感じた。

リレーの学習内容を見定めてしっかり計画し、今回の単元構成や本時の授業で、よく子供たちは学習できていたと感じた。

○指導助言（林教授）

幼稚園の子供が砂場で砂山を作ると、次に何が起こるか。砂山を作るだけでは終わらない。それはスタートである。そこに木を植え、池を作り、川が流れる。私が位置づき、友達が位置づく。このように、遊びというのは低年齢になればなるほど、テーマ性があり、名前を付け、ストーリー性が出てきて、徐々に発展していく。小学校の体育的には、時間、回数、距離の増減によって、上手になっているところを確かめていく。

「カマキリになってください」と言われたら、何をイメージするか。「こうなっているからカマキリだ」というレベルから始まる。それは外から見た視覚的情報で、模倣のレベルならそれでいいが、表現となってくると、「何を表現するか」ということになる。「○○しているカマキリさん」だと動きが変わる。本時でカマキリの時、授業者は子供たちをリードしながら、「ゆっくりいってビュッ」と言っていたが、なぜ「ゆっくり」なのか。「獲物に気づかれたら逃げられるからゆっくり」という気持ちで動いているのと、「ゆっくり動いている」のとでは変わってくる。今日は子供たちのオノマトペをあまり拾っていなかったが、授業者は色々なところでオノマトペ「ピュッやシュッ」を使っていた。このオノマトペを子供たちに言わせたらどうなるか。子供たちがどんなオノマトペを出すか、それは一様ではない。その違いの奥にどんな表現を考えていたのかということが出てくるのではないかと思う。「そーっと、そーっと」と発言する子供と、「スルスルスルスルッ」という子供では、カマキリが獲物に近づいているときの気持ちが違うのではないか。そういうところで内面に入り込むことができると、動きやすいのではないかと思う。最後に授業者が子供たちの言っていることを取りあげていたが、あそこで一番子供たちが動いた。それは、スズメバチのときだったが、授業者は何と言っていたか。

《(南教諭の発言)「怒ってる羽音でブーン」》

静かなブーンではなく「ブゥゥーーンン」と言っていた。それで子供は怒りと「ブゥゥーーンン」が重なって、一斉に広がって動きだした。そういう

「何を」っていう部分があると、表現というものは出る。
　高学年であると、それはおそらく抽象的なものになる。平和や幸福、争い等である。「老人の真似をしてください」と言われたら、どうするか。腰を曲げるポーズが多いかと思うが、老人であれば、「若くありたい」「あの若い時の体が欲しい」と思う。それが老人の気持ちである。ただ腰が曲がるだけが老人ではない。そういったところまで突き詰めていけると、本当の表現とはどのようなものなのかというところになるのではないか。授業者は、子供の動きを、「ゴロンゴロン」とか「ガサガサ」とか子供が出した虫の動きを一つ一つオノマトペで伝えようとした。「ゴロンゴロン」と言うと、みんな一様に似たような動きをするが、動き方には違いがある。そういうところをオノマトペにしたり、子供に返したりすることで動きが広がっていくことになる。
　次に、「めあてに迫るために」というところであるが、「どんな」「何が」というものと「いかに」という二通りがある。つまり、どんな教材が子供を主体的にするかということと、どうすれば子供を主体的にすることができるかということである。つまり、前者の方は、授業に入る前や授業間の教員の努力が大きく、後者は授業中の働きかけが大きい。授業中、その時にほめてあげてほしい。褒める・認めるだけで終わらないで、直してあげた方が良い。「その動きはどうかなぁ」「ここはどう」「もうちょっとここ直してみたら」などである。今日は、働きかけることができていた。
　もしくは、褒める前に直してあげてほしい。「次はこんなことに気を付けてやってごらん」その後に「できたじゃない」「よかったね」「こんなところよかったね」と具体的に褒めてあげてほしい。実習生の授業を見ると、「やった」「うまい」「いいね」とよく言っているが、「何が」という印象を受ける。「何が」を付けて褒めていただきたい。さらに、褒める前に子供に尋ねてみてほしい。「何をしたいのか・どうしたいのか」そして、子供の考えを受理してあげてほしい。「じゃあやってごらん」「できたじゃない」「次こんなことに気を付けてみて」という言葉を使って、もしくは、「何をしたいのか」「あっそう、それだったらここ気を付けた方がいいよ」「やってごらん」「ほらね、できたでしょ」というパターンなどである。これをしっかり多用してほしい。
　そして、低学年・中学年・高学年で変わってくるのは、教員の話し言葉の末尾である。小学校では基本的に「やれ」という言葉はまず使わないと思う。「やろう」「やろうね」「してみよう」「してみようよ」「がんばってるな」「がんばってるねぇ」と語尾を伸ばすだけでも授業の雰囲気はずいぶん変わってくる。当然優しい方が低学年で、高学年になるほど、勢いよくなる。こういった言葉の使い方も子供を主体的にしていくものだ。このように、教師の働きかけとして、褒める・認める・直すということをしていってほしいと思う。

それから、「どんな」という課題であるが、めあてとか課題を作る時に、場を設定したとしたら、場には必ず課題性が含まれる。例えば、的を作ったら、的に当てることが課題となるが、「的をねらえ」では、あまりにも直接的すぎるので、いかに子供側の課題とマッチングさせるかが大事になってくる。例えば、的に大谷選手の絵を書いたら、大谷選手から三振を取ろうという課題に変わってくる。しかし、的をねらうというめあては変わっていない。子供側の見え方と、元々の場や教材が持っている課題をどうやってマッチングさせていくかというところが大事になってくると思う。その両者が上手くいくと、学習と教えることがイコールで結ばれる。

低学年は未分化である。考えることとやっていることが別々ではない。代表的なものが生活科である。生活科ではまずやってみて、その中でいろんな発見があった、こんなことがあったと、いろんな情報を身につけていく。やることと考えることが同時に展開されているのが低学年である。そうすると、今日の授業では「特徴は何だろう、特徴を表そう、チームの特徴を見つけよう」などとあるが、特徴は最後にでき上がるものである。一つ例をあげると、図工で絵を描くとき、大人は構想があって塗り始めたり、描き始めたりするが、子供は最後に「あ、できた。僕はこんな絵を描きたかったんだ」につながる。だから、子供は最後に。「先生、これでいい」と聞いてくる。良いかどうかを教員が決めることではないが、子供はゴールが分からないので、試行錯誤しながら「できた、僕はこれが描きたかったんだ」というところにたどり着く。そのため、小学生の場合はあまり先のことを考えすぎることがないように、気を付ける必要があると思う。

今日のリレーの授業であると、5・6年の時にはどのように学習を発展させていくのか。

《(土橋先生の発言)「人数を増やす」「異質なペア同士で組み合わせるなかで、より良いバトンパスを目指す」》

カリキュラムは小学校一年生から中学校まで続くので、ここでやったことがどうなるのか、もしくはこれまで何を積み重ねてきたのか、というところも同時に考えていってほしいと思う。土橋先生の回答のように、「人数が増える」ということは、足の速い子もそうでない子も身長が高い子も低い子も男の子も女の子も、いかに相手に自分が合わせるかが大事なる。そして、地域の大会とか県の記録会に出る時など、オーダーを考えると思うが、最終的にそこになってくる。4年生から6年生まで見通しを持ってほしい。これまで何をしてきたかを調べるレディネスアップの時間を取ってほしい。つまり学習の準備状態を確認するということである。先ほどの例でいうと、１０ｍ先に的を作ったが、子供は７ｍしか投げることができない。解決方法は２つあり、一つは、「的を近づける」もう一つは、「その子の投げる力を高める」である。その両方から迫っていくことができると思う。小学校ではバスケッ

トボールやサッカーなどの専門的なスキルは求められていない。でも、サッカーをするならば、ボールを足で操作しなければ、ルールを守りながら作戦を展開することはできないし、ゲームを楽しむことはできない。バスケットボールなら、ドリブルしながら相手をかわしてパスを出さなければいけない。ゲームを楽しむためには最低限の必要な技能がある。キックベースボールでどんな技能が必要か考えると簡単で、蹴ること、止めること、走ることの３つである。だから低学年でも十分できる。逆に高学年だと簡単すぎて合わない。求められる最低限の必要な技能から、何年生にはこんなゲームをなどと、教材を考えるということもできるのではないかと思う。

最後にタブレットの活用だが、動画を撮ってもスピードが落ちているか見とれないという話があった。目的に応じた活用の仕方があるが、どの学年にどんなことが可能なのかということを見つけていってもらえたらと思う。例えば、体育でゲームを撮った。その時に、大事な部分を撮れるのは何年生くらいからなのか。それを見てこれが課題だと見つけられるのは何年生くらいからなのか。そして、実際にそれを動きに変えることができるのは何年生くらいからなのか。それを４年生でも５年生でも６年生でも求めているということはないだろうか。課題を発見するのが４年生なら、工夫して動きが変わったかどうかを導くまでが６年生など、タブレット一つ使うにしても、子供の発達の段階との関係性で適切な時期があると思う。こういうことを実践の先生方と大学の人間が一緒になって考えていければいいのではないかと思っている。

今日は２つの授業を見たが、子供たちが非常に一生懸命だった。子供たちは笑顔だった。これは体育の一番のベースのところが確保されているからだと思う。つまり楽しい体育だったということだ。その上で、みんなが上手になるにはどうしたらいいかということが具体的に目の前に出ていたのが今回のリレーの授業だった。動きを子供と共にどう高めていこうとしていたのかが今日の表現の授業だった。今日の授業は、楽しい体育の中で一人一人がどう育つ、上手になるということを目指した体育であった。

分科会

海南市立第三中学校

『主体的・対話的で深い学びの実現に向けた保健体育の授業づくり』

授業者	西脇　公孝
学年・領域（単元）	第１学年・球技 ゴール型（バスケットボール）
運営	中南　桂太（巽中学校）
	相谷　直佳（下津第二中学校）
司会	井邊　正城（東海南中学校）
提案	芝﨑　公彦（巽中学校）
指導助言	中岡　曉紀（県教育委員会）
記録	嶋田　雄介（亀川中学校）
	平　　晃知（海南中学校）

1　提案内容

【研究主題】

「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた保健体育科の授業づくり」

～共生の視点を重視して～

【設定理由】

平成２９年告示中学校学習指導要領において、保健体育科の目標は「体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を発見し、合理的な解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質･能力の育成」と明記されている。

また、中学校学習指導要領解説保健体育編における改訂のポイントは、「豊かなスポーツライフを実現する資質・能力の育成」「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」「体育や保健の見方・考え方を働かせ」「共生の視点」「カリキュラムマネジメント」などがあげられている。

このことから、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」と「共生の視点」に焦点を絞り、授業づくりを行うことで、保健体育科の目標の達成につながると考え、主題を設定した。

【研究への取組】

教員が主体的・対話的で深い学びとは何か、共生を重視した授業とは何か、どのような学習方法が適しているのか等の理解を深めるために、共生体育を研究されている先生の講演や研修会で研鑽を積んだ。

また、共生の視点からの授業改善を実現させるために、保健体育科のみならず、学校全体で協力して学習体制及び指導体制の整備を行った。

【研究方法】

1　主体的・対話的で深い学びについて

「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料（文部科学省国立教育政策研究所）の中の【学習指導要領を理解するためのヒント】にある、「学習者」「授業者」の各視点と以下３点を参考にした研究授業・協議から検討した。

(1)　主体的な学びについて

①　学習者の視点は、学ぶことに興味や関心を持つこと。

②　授業者の視点は、既習事項を振り返ることや具体物を提示してひきつける。子供が明らかにしたくなる学習課題を設定した。

(2)　対話的な学びについて

①　学習者の視点は、子供同士の協働を通じ自己の考えを広げ深める。

②　授業者の視点は、思考を交流させる、交流を通じて思考を広げる、協働して問題解決する。

(3)　深い学びについて

①　学習者の視点は、各教科の特質に応じた「見方・考え方」を働かせる。

②　授業者の視点は、資質・能力を焦点化する(付けたい力を明確にする)、単元や各授業の目標の把握。

２　共生の視点について

障害、国籍、性別、技能、年齢、体力などの差や違いを受け入れ、「静かなる排除」を取り除き、全員に同じ参加機会をつくるための授業展開やルールの工夫、アダプテーション（調整）を球技の単元を中心に取り入れた研究授業・協議から検討した。

【アダプテーション・ゲーム】

アダプテーション・ゲームは、短い時間のゲームを実施し、ゲーム終了後負けたチームが勝ったチームに対してルール等のアダプテーション（調整）をするための交渉を取り入れたゲームである。

（例）

〇相手チームの人数を減らす

〇自分たちのコートを狭くする　など

交渉によって、お互いの能力が均等（または逆転）になり、両チームとも全力を出せることがゲームの狙いであり、生徒同士が「差」を認め合い、競り合ったゲームでチャレンジして、楽しめるようにすること。

【研究の成果】

１　主体的・対話的で深い学びについて

(1)　既習事項を確認し、めあてを明確にすることで、学ぶことに興味関心を持つことができた。

(2)　ワークシートに振り返りを記入することで、自己の課題を発見・解決につなげることができた。

(3)　ペアやグループによる協働活動の中で、自己の考えを深め、思いや考えを伝え合うことで、自他の評価につながり、主体的に課題解決に向かうことができた。

２　共生の視点について

(1)　アダプテーション・ゲームについて

授業者の支援に基づき、学習者が主体的に PDCA サイクルを行う学び合いが大切であり、他者理解・他者受容、参加機会の均等、思考力・判断力・表現力、技能の４つの成果が得られたと考える。

①　他者理解・他者受容＊について

○　生徒たちが、以前よりも他者についてより深く考え、理解しようとする姿が見られた。
○　違いを認め受け入れる姿があらゆる場面で見受けられた。

②　参加機会の均等について
○　今までは活躍できなかった生徒が活躍できるようになった。
○　能力の高い生徒もそうでない生徒も、勝ち負けの予想がつかない接戦の勝負を最後まで楽しむことができるようになった。
○　競り合ったゲーム展開の中で、勝利を目指し全力でプレーし、ゲームを楽しむことができるようになった。
○　仲間と関わりながら運動の特性に触れながら、ゲームを楽しむことができるようになった。

③　思考力・判断力・表現力について
○　チームでの話し合い活動で、どのようなアダプテーション（調整）を、どの生徒・チームにするのかといった思考力・判断力が高まった。
○　交渉や合意形成の過程で、どのように相手に伝え、どのような言葉で表すかなどの表現力が高まった。

④　技能について
○　高まる動き・能力を意識することで、技能の向上につながった。
○　生徒が高まる動きを説明できるようになり、戦術的な理解が深まった
○　グループ編成をくじ引きやランダムで編成することで、性差、能力差などの違いを認め、協力する姿が多く見られるようになった。
＊　各学年で学習する体育理論の「運動やスポーツの多様な楽しみ方」「スポーツが心身及び社会性に及ぼす効果」「人々を結び付けるスポーツの文化的な働き」に記載

【研究課題】

1　主体的・対話的で深い学びについて

今回の研究において、授業者の授業改善のために複数の学習方法を実施することが目的になり、一方通行の授業になっていたところがあった。

このことから、授業者、学習者の各視点が往還させながら授業改善に努め、主体的・対話的で深い学びの実現につなげなければならないと感じた。

また授業者は、学習者の学びの改善を基に、途切れなく授業改善を行わなければならないことを改めて感じた。

２　共生の視点について

(1)　アダプテーション・ゲームについて

①　授業者、学習者の提案するルールが、個人やチームに対してなど複数設定され複雑になってしまったため、簡易で分かりやすいルールの考案

②　各領域の、運動特性が失われないようにしなければならない。

③　運動の特性を味わうためには基本技能の習得が必要であるため、アダプテーション・ゲームに多くの時間を費やすあまり、基本技能の習得が疎かになった。

④　ルールの考案や採用、対戦相手との交渉に時間を要してしまい、これまでの授業と比較して運動量が減少してしまうことがあったため、ルールの考案や採用、対戦相手との交渉の時間などを円滑に行う工夫が必要だった。

(2)　単元内容ついて

①　単元によって、性差や能力差を受け入れた活動ができていなかったため、単元や生徒の実態によっては、男女別・能力別に分けて行う方が効果的なものもあった。

②　短期間での取り組みの中で、生徒が授業形態の急な変化に困惑する場面も多々見られたため、中学１年生から、さらに言えば小・中学校が連携し、継続的に授業展開できるよう長期的な計画の必要性を感じた。

③　共生の視点について取り組んだ単元が限られてしまったため、十分な成果が得られなかった単元もあった。

④　性差や能力差、障害の有無について研究することはできたが、国籍の違いや他の様々な差や違いに配慮した、共生体育の授業研究は十分行えなかった。

【今後の取組】

各単元の授業において、授業者の授業改善につながるものであったのか、学習者の視点を実現し、身に付けさせたい能力を育成することができたのかなど、最も重視すべきことを忘れず、授業の計画・実施・振り返りを行っていかなければならない。

また、各単元の内容に合わせてアダプテーション（調整）が効果的なのか、男女別や能力別が効果的なのか、授業展開を検討していかなければならない。

今回の研究では、アダプテーション・ゲームを採用し実践することで、教師も生徒も何度も話し合い試行錯誤することで多くの課題発見とともに一定の成果を得ることができたため、今後も継続して取り組んでいきたい。

２　研究協議

○授業者より

日々、「共生の視点」に着目して、授業づくりを行っている。

体育では、知識や技能の習得、主体的・対話的で深い学びの実現、運動の持つ楽しさを追求する授業を目指してきた。

教材研究をする上で、「共生の視点」というと構えてしまうが、運動をみんなで楽しむために工夫するという視点で研鑽してきた。

これまでの単元においても、全員が活躍でき、全力を出せるように、楽しくなるようにという視点で考えられるようになることを、ねらいとして授業を進めてきた。

本単元のバスケットボールでは「全力プレーで競り合ったゲームを展開し、全員が活躍できる」を、オリエンテーションで単元のめあてとして掲げ、生徒と共有しながら進めてきた。

「共生の視点」で導入するアダプテーション（調整）については、はじめに体育理論の授業で扱い、知識として生徒理解に努めた。また、アダプテーション（調整）を体育実技の学習で導入するとどんなゲームになるのか、動きは変わるのかについては体験させながら学習を進めている。

アダプテーション（調整）については、生徒からは良い意見ばかりではないが、バスケットボールの単元では比較的スムーズに導入ができた。

本単元のチーム編成方法は、ランダムに割り振りを決定しているが、本学級にはバスケットボール部が５人在籍していたため、バスケットボール部員が重ならないように配慮した。

これまでの単元でも、誕生日順で割り振りをするなど、ランダムにチーム編成を行ってきた。

また、１年生の授業ということもあり、技能の習得にも励んでもらいたかったため、バスケットボール部をスモールティーチャーとして授業を進めた。

単元の技能の大きな目標は「ゲームの中でレイアップシュートを打てるように」に設定した。

レイアップシュートは、比較的決定率の高いシュートであることや、ゴール下まで協力してボールを運ばなければならないことなどを説明し、技能の習得を目指してきた。現状では、バスケットボール部だけがレイアップシュートを授業の中で行っている状況である。

本時のめあては「競り合ったゲームをつくろう」に設定した。

ゲームの勝敗の競り合いのみならず、技能の面でも競り合ったゲームとなるように意識をするように説明した。

また、ゲームを行うと技能面に差が出てくるため、アダプテーション（調整）を導入し、みんなが活躍できるゲームづくりを目指した。

本単元の成果は、前回授業の前半の技能練習でみんなと同じように練習をしていた際に、同じチームの生徒から「○○はスピードが出しづらいから、○○

が試合に出る時はお互いのチームで走らないというのはどうか」というアダプテーション（調整）の提案があったことだ。
学級内に様々な生徒がいる中、「チーム全員がシュートを決める」方法を考えたとき、その生徒がみんなと同じように活動するのは難しい部分が多々見られたため、アダプテーション（調整）を考案したと考えられる。
また、相手チームはそのアダプテーション（調整）を受け入れ、それを全体で共有していた点においても成果を感じた。
自分自身、すぐに受け入れられるとは考えていなかったため、生徒側から提案があったことに驚くとともに、生徒たちが、技能差、障害の有無をアダプテーション（調整）によってどのように工夫できるか、日々試行錯誤していることがわかった。
アダプテーション（調整）を導入するにあたり、現段階では、自分の要求が伝えられること、困っていることは何か、自分はどんなプレーがしたいのか、それらを実現するために意見を伝えることができれば良いと考えてきた。
自ら伝えられるということは、他者理解が必要となり、授業に主体性を持って取り組まなければならないと考える。
課題としては、１年生の段階では、自分が楽しむことを中心にプレーすることで周りが見えなくなり、全員が活躍するための動きが減少してくる。そのため、同じチームの生徒が、リングまでボールを投げることが出来ないという点について、本人も周囲の仲間もすぐに気付くことができなかったことが挙げられる。
今後の取組目標は、自分も楽しみ、その中で仲間を動かせることである。排除される生徒、吹きこぼれる生徒がなく、全員が楽しめる体育授業を目指して授業改善を進めていきたい。

○質疑応答
日高地方　教諭

【質問内容】
①　キャプテンが交渉する場面が難しいのではないか。交渉の仕方で悩まれた点、工夫された点はどこか。
②　キャプテン交渉で、アダプテーション（調整）の回数制限などの設定があったのか。

【回答】
① チームでの交渉だと意見が出すぎてまとまらない。少しでも円滑に進めるためにしている。またチーム代表として交渉した内容をチームに伝える能力の育成を図れたらと思っている。今後は日替わりで役目を変えたりできればと考えている。
交渉時間は、今回は短いと感じた。話し合いを活発にできるのは良いのだが、時間があればあるほどしてしまうので短い設定で行った。
② 数の指定はしていない。交渉し、お互いが納得できる内容であればと考えている。

東牟婁地方 教諭

【質問内容】
① 今後アダプテーション（調整）を追求していくのか、アダプテーション（調整）が１つのツールとして来年は違う取組をして共生の視点につなげていくのか。

【回答】
① １年生では、要求することができる、周りの人のことを考えることができる。２年生では、話し合いがより円滑になり、ゲームの中で理解をして実践ができる。３年生では、ルールの概念を取っ払うなど、柔軟で自由な思考になればと考えている。
今後のアダプテーション（調整）では、自分１人ではできないので全員で取り組んでいければと考えている。

和歌山市 教諭

【質問内容】
① お互いの違いを認めるために違いを知るということは、どのように探ったのか、どういった準備や取組をされたのか。

【回答】
① 個人思考の部分で自分がしてほしいことや必要なことを最低１つは出し合い、持ち寄ってグループで共有することとした。

○指導助言

【「共生」の在り方について】
運動重視の体育で良いのか、ということを前提とする。国のスポーツ基本計画においては、運動に関する知識、スポーツに関する知識をどう活用するのかが示されている。スポーツ政策として、第１期・第２期スポーツ基本計画において、体力に関する記述では、体育・保健体育授業の充実を通して、「昭和 60 年頃の体力水準まで体力を戻す」ことなどが目標の一つとして示されていたが、第３期の今後の施策目標には、上述の目標は示されていない。これは、体

力が必要でないということではなく、体育・保健体育授業において技能の向上とともに運動好きな子供や日常から運動に親しむ子供を増加させることによって、生涯にわたって運動やスポーツを継続し、心身共に健康で幸福な生活を営むことができる資質や能力を育成することに繋がると考えられる。国の施策目標の一部には、１週間総運動時間 60 分未満の生徒の割合が 12%となっているため、これらを半分の数値としたいとの記載がある。卒業後、運動やスポーツをしたい児童・生徒の割合が 85%前後の推移を 90%にしたいと考えている。その中で、一人一人の違いを大切にし、授業への均等な参加を促していく。児童生徒がここにいてもいいんだ、自分も一緒にやっていいんだという心理的安定性を保てる授業づくりをしていくことが私たち教師の役目となっていくのではないか。男女共習については、すべてのことを一緒に行うことだけではなく、効果的に学習形態を設定する必要がある。当然のことながら配慮も必要不可欠となってくる。運動やスポーツを通して共生社会の実現を図りたいということがねらいである。

【「共生の視点」の実践】

アダプテッドを実践された先生方は理解できると思うが、生徒の意見から「こんなものはいらない」、「面白くない」などの意見が出ることが想定される。これらによって、乗り越えられない、困ってしまう、また、このこと自体を受け入れられない先生方もいるかもしれない。しかし、これから様々な人々と互いに支え合いながら生きていかなければならない子供たちにとって、国の示す「共生の視点」を踏まえた授業づくりは、貴重な学びの機会になると思います。先生方にもご理解いただき、現場で活用してもらいたいと考えている。

「交渉」の場面については、現段階では、教師を介して行っていたが、生徒同士で行った際、起こり得るトラブルは、学びの機会としてのチャンスである。今回の授業では、一人の生徒に対しての受け入れ、参画をみんなで保障することができていた。「わがまま」こそ、学びのチャンスであると考えられる。「わがまま」が出たらやめるのではなく、挑戦してもらいたい。

【「指導と評価の一体化」の重要性】

授業を組み立てる際は、話し合い活動などの時間を意図的に設定することが大切である。１時間目にオリエンテーションで説明し、授業の計画を生徒と共有する。どの時間に何を指導するかなどが曖昧になると意図しない方向に進んでしまう。生徒に伝え、見通しを持たせることで安心感を与え、授業が展開できる。技能における評価機会の場面では、その時間の指導を評価するのではなく、事前に指導した内容を事後の時間で評価する。その時間に指導したことを評価するということは、「できる」「できない」を見極めるだけということになる。今後、各地方でも指導計画の作成の際に留意いただきたい。

【まとめ】

今回の海草地方の研究については、様々な感じ方があると思われる。研究に取り組まれた海草地方の先生方に敬意を表したい。子供たちを変えることができるのは、先生方である。先生方がそれぞれ持っている得意分野を生かし、学校や地域において保健体育科の充実のために自分には何ができるのか、どんなことを子供たちに伝えられるのかを考え、今回の学びを有意義なものにしていただきたい。

分科会

和歌山県立海南高等学校

『スポーツの多様な楽しみ方を学び続けられる
人材育成を目指した授業づくり』

授業者	山本　さおり
学年・領域（単元）	第２学年・球技 ネット型（バレーボール）
運営	大上　　聖　（海南高等学校）
	庄田　光敬　（海南高等学校）
司会	谷本　真宣　（海南高等学校）
提案	山本　さおり（海南高等学校）
指導助言	増野　　彰　（県教育委員会）
記録	庄田　光敬　（海南高等学校）

1　提案内容

【研究主題】

運動やスポーツの多様な楽しみ方を共有する体育授業を目指して
～生涯にわたって運動を楽しむための工夫を、男女共習バレーボールで考える～

【設定理由】

平成30年告示高等学校指導要領では、保健体育科の目標として『体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を発見し、合理的、計画的な解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを継続するための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。』と明記されている。それを受け、高校体育の役割として、スポーツとの多様な関わり方を状況に応じて選択するとともに、卒業後も継続して実践することができるよう、主体的で対話的な学びの実現に向けた授業作りを行うことで、目標の達成に繋がると考え、主題を設定した。

【研究内容】

主体的で対話的な学びの分野において、多様な価値観や運動能力の差異を認め合い、性別の枠を越え、どのような工夫をすることで、全員が充実してスポーツに親しむための手立てができるかを考え、次の点を重視して授業を展開した。

1　学習形態の工夫

(1)　共生の視点

初期段階では、バレーボールの基礎的な技術を習得できる喜びを感じやすくするために、ネットを設置せずにペアやグループでパスをつなげることを中心に行った。

(2)　対話的な学びの視点

中期段階では、競技としてのバレーボールのルールを把握させた上で、生徒自らがルールを考えられるようにするため、チームを編成し、チーム内での役割やルールの工夫、必要な技術練習などの意見を出し合い、共有することで、主体的に学ぶことができるようにした。

(3)　主体的な学びの視点

最終段階では、総当たり戦を行う中で課題を発見し、解決策を話し合うとともに、新たな戦術や戦略を立て、メンバーを構成し、全員が楽しみながら試合を行えるようなルールを導入して展開した。

「スポーツの多様な楽しみ方を共有する授業作り」の実践に向けた指導として、スポーツの楽しみ方には「する」ことのみならず、「みる、支える、知る」などの多様な関わり方を構想したり、設計したりすることの重要性を理解させた。

これを踏まえ、チーム内での役割を決め、一人一人が楽しみ方を発見し、他者に伝える機会を設定し、全員が主体的に取り組めるようにした。

２　指導にあたって

事前アンケートの「男女共習のイメージ」の質問に対して、「楽しそう」、「力の差がありそう」、「お互い遠慮しがち」等の回答があったため、授業を重ねる中で、どのような変化が表れるかを観察した。

また、様々な場面において生徒自らが楽しみを見つけられるような場面設定や発問を行いながら授業を進めた。

２　研究協議

○質疑応答

１班　和歌山市　紀の川市　有田市　教諭

【質問内容】

①　チームを分けるにあたってどのような点を配慮したか（男女共習のため）

②　（ルールにおいて）サーブをエンドラインより前から打っていた生徒がいたが、全授業を通してのルールを設定しているのか、前回の授業（第４回目までの授業）の名残なのか

③　前回（第４回目）までの授業展開及びつまずいた点

④　評価について、学習カードの配点はどうなっているか

⑤　実技試験は実施しているか

⑥　チームのメンバーはずっと同じメンバーか

⑦　バレーボール以外の選択種目は何があるか

⑧　１年次にバレーボールを履修しているか

【回答】

①　バレーボール経験者、運動の得意な生徒、また活発な生徒が同じチームに偏らないよう配慮した。

②　前回までサーブの位置は指定せず、エンドラインの中から打つことを許可しており、本時もその名残があった。

③　１時間目は、アンダーハンドパスやオーバーハンドパスなどの基礎練習を２人組で実施した。(生徒自らがラリーを繋げたいという気持ちが積極的に出てきた)。グループで繋げる際は、ワンバウンドも可能とし、ラリーを続けることを目標に工夫した。

つまずいた点は、生徒たちから出てきたルール説明の言葉が曖昧なため、試合中に戸惑う場面があった。そのため、具体的に分かりやすく説明するように指示した。

④　指導と評価の計画において、知識・技能、思考・判断をそれぞれ２つずつ（①・②の項目）設定し、５０：５０になるように考えた。

⑤　特に計画していない。(ゲームの中での動きを観察して、守備位置や相手の攻撃、味方の移動で生じる空間をカバーできているかなどを中心に評価)

⑥　チームのメンバーは２時間目から同じである。チームを替えることも検討したが、同じチームで続ける方が絆も深まり、作戦も考えやすいと判断した。

⑦　バレーボール以外に、バドミントン、サッカー、テニス、卓球の全５種目展開
⑧　１年次に選択種目としてバレーボールを実施しており、全ての生徒が実施しているわけではない。

２班　橋本市　和歌山市　教諭

【質問内容】
①　今後実技試験の予定はあるか、生徒たちの技能の差によって取り組む内容を変えて実技試験等を実施してみてはどうか。
②　学習カードは毎時、授業内で書くようにしているか

【回答】
①　今回の男女共習のバレーボールの技能評価は、チームとしての動きを試合の中で観察してつけようと考えている。今後、生徒の技能別の実技試験やポイントを１つ決めて技能を観ることも検討していきたい。
②　本時は授業内で振り返ることができたが、時間が足りない時はその日の昼休憩もしくは、放課後に提出させている。

３班　和歌山市　田辺市　東牟婁　教諭

【質問内容】
①　学習カード、提出物は毎時間あるか、ある場合はどのような内容か。

【回答】
①　各種目学習カードがあり、毎授業終了後に提出。その中で、思考力・判断力・表現力が問えるように作成している。また、自己評価や他者評価を記入するようにし、参考資料としている。

○指導助言

【授業について】
　すごく雰囲気が良く、明るいムードで授業が展開されていた。３回目の授業を参観したが、「ワンバウンド可」、「サーブはゆっくり打つ」という約束から、生徒たちは下からサーブを打つなどの工夫が見られた。そのような段階を経て本日の授業、そして次回からは普通のルールでやりたいと生徒たちが考えるようになっていった。生徒たちが、自分たちで提案したものを実感しながらどんどんブラッシュアップしていく感じがある。その中で、「ラリーを楽しむ」ことが生徒たちの中に定着してきたため、積極性やサーブの強さなどにおいて相手への配慮が見られ、生徒たちの学習に繋がっているように思われる。また、ラリーが続くようになってきているため、もう少しレベルをあげてやりたい（ルールにおいて）という意見が出てきている。
　チームのメンバーは２時間目から同じであるため、チーム内での発言や声かけも３回目よりも多くなってきている。また、３時間目の授業では、男子と女子がそれぞれ横並びのポジションでローテーションをしていたが、コートに穴が

でき、ラリーが続かないことが多かったため、生徒達が考え、男子・女子の交互のポジション変更や、上手な生徒が苦手な生徒を挟むなどの工夫が見られた。これらが、ラリーが続くようになった要因のひとつではないかと考える。

【男女共習について】

共生の視点に立ち、男女共習を行っていく必要がある。その中で、「誰もが参加できるような教材の工夫」「生徒に身につけさせたい資質・能力」の２点を重視して授業を展開することが重要だと思う。教材の工夫では、例えばコートの広さ、コートの中の人数、痛くない柔らかいボールの使用などがある。ルールの工夫では、例えばボールをキャッチしても良い、４回まで触っても良いなどがあるが、全て教師が提案するのではなく、生徒たちが気付けるような発問をすることが求められると思う。

「生徒に身につけさせたい資質・能力」は、多様な仲間を受容できる資質が大切であり、様々な生徒、能力の差がある中で、お互いどのように貢献したり、カバーし合うことができるかを身に付けることで、共生の視点としては良いのではないかと考える。